

4-P-A②-4 ポスター

9月4日(金) 10:00~11:00 ポスター会場 パシフィコ横浜 展示ホール1階 B
一般的なケア② 【座長】皆川 守(横浜市立脳卒中・神経脊椎センター介護老人保健施設コスモス)

第1群: 101 入所

第2群: 203 一般的検討(意義・必要性・変化・効果・比較)

第3群: A3303 一般的なケア ケアの質の向上

BPSDへの対応に関する勉強会からの学びと課題

介護老人保健施設 プライムケア桃花林
齋藤 亮

当施設の認知症専門棟のスタッフは、日々BPSDの対応に苦慮しながらケアを行っている。そこでBPSDへの対応に関する勉強会を実施した。スタッフの勉強会からの学びと課題について報告する。

1.はじめに

当フロアは要介護3～5(障害老人の日常生活自立度A1～C1、認知症の日常生活自立度IIIa～IV)の認知症の方が約50名生活する認知症専門棟である。

ケアスタッフは日々BPSDの対応に苦慮しながらケアを実施している。中でも不穏や帰宅欲求が強く落ち着かなくなる方への声掛けや接し方、介護方法等はどうしたらよいのか、また、暴言や暴力、介護に抵抗する方への対応に困るといった声がケアスタッフから多く聞かれていた。

そこで、杉山孝博氏の「認知症をよく理解するための9大原則・1原則」及び「上手な介護の12ヶ条」をもとに、BPSDの理解とその対応について勉強会を行った。その勉強会からの学びと課題について報告する。

2.研究方法

1)対象者: 認知症専門棟のケアスタッフ30名

2)勉強会の概要

(1)筆者が、「9大原則・1原則」、及び「上手な介護の12ヶ条」を用いて、30分～1時間程度の講義を行った。ケアスタッフ全員が1回ずつ参加した。また各サービスステーションに「9大原則1原則」及び「上手な介護の12ヶ条」を貼り、常にケアスタッフの目に触れるように配慮した。

(2)勉強会終了後、ケアスタッフの学びと利用者への対応の変化を知るために、半構成的アンケート用紙を用いて学び、課題について記載してもらった。

3)研究期間: 平成26年10月から平成26年11月まで

4)倫理的配慮

対象者に研究の目的と内容、方法を説明し承諾を得た。またアンケートへの記入は無記名とし個人が特定できないよう配慮した。

3.結果

1)対象者の属性

アンケートに協力してくれた対象者は21名(70%)であった。対象者の認知症ケアの経験年数は、平均6年5カ月で、最長の者は20年8カ月、最短の者は5カ月であった。

2)勉強会に参加して一番学んだことについては、「認知症の方にはそれぞれの世界がありその世界を理解することが大切」「少しでも現実とのギャップを感じさせないようにする」「説得や否定はこだわりを強めてしまう」「なるべく心穏やかに接する等、安心して過ごせる環境を作る」「BPSDの症状、行動がよく理解できた」など、が挙げられた。

3)自分の対応方法(声掛け・コミュニケーション)で変わったと思うことは、「利用者を理解しようとし、相手の立場になって声掛けするようになった」「話を最後まで聴くようになった」「不穏な時には「どうしましたか?」と声掛けし話を聴くようになった」「利用者を尊重し本人の言動を否定したり強い口調で言わない」「やさしい声掛けを心がけることで、不穏が少し落ち着いたり、納得してくれることも多くなった」「感謝したり、ほめる声掛けが多くなり、利用者に、笑顔がみられたり、話をしてくれるようになった」等の対応の変化がみられた。

4)ケアをするうえで新たに工夫したことや注意するようになったことは、「利用者のペースに合わせて、どうしたいのか観察しゆっくり対応する」「一手だけ先手を打つことを意識してケアを行った」などであった。

5)今回の勉強会頻度(1回のみ)についてどう思ったかでは、「十分であった」が12名(57.1%)、「不十分であった」9名(42.9%)であり、さらに「複数回(2回～4回程度)実施してほしい」という者が4名(19%)であった。

6)今後、開催してほしい勉強会では、「BPSDへの対応について定期的に開催してほしい」「スタッフのストレス軽減やストレスの少ない介護法について」開催してほしいなどの要望があった。

4.考察

杉山孝博による「認知症をよく理解するための9大原則・1原則」及び「上手な介護の12ヶ条」をスタッフ全員で共通理解し、日々の認知症ケアに生かす目的で勉強会を実施した。BPSDの対応で大事なことは、認知症の方のそれぞれの世界を理解するように努め、その方に寄り添い現実の世界とのギャップを少しでも感じさせないようにケアをして

いくことである。

今回の勉強会でそのことを学べたことは大きな成果であった。また、これらの法則は、理解するのに易しく在宅介護している家族にとっても理解しやすい内容である。このことから、経験年数が少ないスタッフにも理解され、認知症の方の世界を考えてコミュニケーションを取ろうとする姿勢や、自分が発した感謝の言葉に対して利用者が微笑んだことなど新たな発見や感動があり、勉強会の効果があったのではないかと考える。また「認知症をよく理解するための9大法則・1原則」及び「上手な介護の12ヶ条」を用紙に記載し、常にスタッフの目に触れるところに掲示したことも、学びにつながったのではないかと考える。

しかし、学びに効果がある一方で、いざ実践となるとケアスタッフの日々のストレスをなんとかしてほしいという声も切実であった。頭で理解していても、仕事に追われ疲れていたり、利用者が対応に対し正の反応を示してくれなかったりすると、つい感情的に対応してしまうこともある。感情労働とも言われる認知症介護をストレスなしでは語ることはできない。

5.おわりに

勉強会がいろいろな面でスタッフのBPSD対応の学びにつながったが、今後は、スタッフのストレスマネジメントを行いながら、知識をどのように実践に繋げていくかが課題である。

今後も利用者に寄り添い、その方に合った最良のケアを提供できるよう支援していきたい。